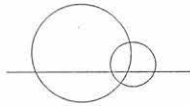


〔若手研究者発表会〕

〔論文〕



愛知大学記念館について

—歴史・史料・これまでの研究—

大学史事務室 佃 隆一郎

はじめに

「明治の面影を残した木造2階建ての大学記念館（旧本館）は、その外観もさることながら、廊下を歩けば明治時代にタイムスリップしたかのような雰囲気包まれます。」と、愛知大学の公式ホームページにも紹介されている「愛知大学記念館」（以下、本文では「記念館」）は、現在文化庁より登録文化財に指定されたうえで、東亜同文書院大学記念センターのもとでの事務室・展示室・研究室・資料室などが入り、歴史的建造物として活用されている。今回の発表会では、（東亜同文書院と直接の関係はないものの）書院センターが現在ある施設を再発見してもらうための参考として、記念館の歩みと各時期の関連史料、それにこれまでの関連各研究について述べてみたい。

・愛知大学記念館（「大学記念館」・旧本館）の歩み

記念館は日露戦争終結から間もない1908（明治41）年、豊橋地区に進駐した旧陸軍第十五師団の司令部庁舎として、南部郊外（当時の渥美郡^{たかし}高師村）に造成された一大敷地の一角に、将校集会所（現研究所棟）などとともに建築された。ちなみに愛知大学豊橋校舎に現在も残っている第十五師団関係建造物のうち、偕行社（現旧短大本館。2011年度解体予定）は翌1909年に、敷地外の師団長官舎（現愛大旧公館）は1912年にそれぞれ建築と、段階的に建てられていった。

「軍都」となった豊橋のシンボリック的存在であり、豊橋地区最初の洋風建造物としての面もあった現記念館であるが、内外の情勢変化により1925（大正14）年に実施された陸軍軍縮「^{うがき}宇垣軍縮」で、第十五師団が廃止されたのにもない、存続・新設部隊の騎兵第四旅団、飛行第七・高射第一各連隊の各司令部や、第三師団経理部出張所に何度か転用されたようである（それぞれの使用期間など詳細は未確認であるが、飛行連隊と高射連隊はいずれも間もなく浜松に移駐したことから、使用されたとしても期間はごく短かったと思われる。また、騎兵旅団は満州事変により1932年に中国東北部へ出動したため、その後経理部出張所に転用されたのであろう）。

そして1933（昭和8）年、27年に歩兵第六十連隊跡地（現豊橋校舎北半分）に新設されていた陸軍教導学校が拡張されたことにより、同学校本



【写真1】竣工、業務開始まもない頃の第十五師団司令部（大塚洋子氏提供の『日本写真帖』より）



部に転用された現記念館は、さらに1940（昭和15）年、3年前より併設されていた陸軍予備士官学校に教導学校が全面移行されたのにもない、予備士官学校（一時期「第一予備士官学校」）本部に転用され、1945年の敗戦による閉校までほとんど無傷のまま使用された。

終戦直後、現記念館は豊橋市が管理し、使用は停止されていたが、旧東亜同文書院大学関係者有志の努力と市当局の協力により1946（昭和21）年11月に設立が認可された愛知大学で、従来の機能を生かした形で本館に転用されたことによりよみがえった。開学当初1階に事務部門が、2階に学長室・教授研究室・会議室等が置かれた現記念館は、まさしく新生愛知大学の、研究・事務両面の拠点になったのである（付属の平屋には1948年に、同年設立の国際問題研究所が入り、1959年に設立された女子短期大学部の本館には、一時期ほかの機関が使用していた旧借行社建物が使用された）。

教職員や学生の記念撮影の背景に使われつづけたとともに、毎年大学の各種案内書のグラビアを飾ってきて、すっかり愛知大学のシンボリック的存在になっていた「愛大のホワイトハウスたる本館」も、1988（昭和63）年の名古屋校舎三好キャンパス開校以後は同本部に比べ機能性や居住性で見劣りしはじめたのに加え、各部の老朽化や陳腐化が目立つようになり、1997（平成9）年、前年完成した新本館での業務開始にともない、「事務棟」としての役目を終えることになった。

しかし新本館建設が具体化した1990年代初めより、本館を文化財として保存・活用すべきとする運動が学内外から湧き上がったのであり（以下詳細は〔別表1〕参照）、各種論議の末保存が決まった旧本館は新本館完成時に「大学記念館」と改称され、さらに1998年には文化庁より登録文化財に指定されたことで、また新たな“人生”を歩みはじめたのである。

〔別表1〕愛知大学での大学記念館（旧本館）保存決定、活用までの経緯（1990年代）

年	月・時期	事 項
1990	夏	施設検討委員会、「本館の状態は極めて危険」との学内調査結果をうけ、本館を取り壊すか、保存するかの検討をはじめ
91	6月中旬	評議会で本館の建替え計画が議題に
	6月下旬	学内一部教員、本館保存を求め学長に要望書を提出するとともに、署名運動を展開
	7	飯田喜四郎名古屋大名誉教授、本館をはじめとする豊橋校舎構内の「旧第15師団施設の遺構」の活用を求める所見を愛知大学長に提出
	11	専門機関の文化財建造物保存技術協会、「愛知大学本館の保存等に関する調査報告書」（保存可能と結論）を大学側に提出
92	5	学部長会議で教職員対象の「豊橋校舎木造建物に関するアンケート」集計結果を発表（文末資料①。「保存したい木造建物」では短大本館がトップ）
	7月中旬	陸軍教導・予備士官学校OB会「高士（たかし）会」、「愛知大学本館を旧軍史跡として保存されたい旨の陳情書」を学長に提出（資料②）
	7月下旬	本館保存派教員が、学外者対象の「旧師団建物見学会」を開催
	11	学内で畔柳武司名城大学教授の講演「日本近代建築史における愛知大学の建物」を開催
	年末	学内アンケートの結果、本館、短大本館、第二体育館、公館の保存と、研究所棟を取り壊して跡地に新本館を建設する方針が定まる
93	10	総合郷土研究所員総会、研究所棟を取り壊しての新本館建設に反対の意を表明
94	3	旧軍木造建物の短大4号館取壊し（翌年2月、跡地に梢風館竣工）
	10	豊橋校舎施設委員会、新本館の建設位置を本館北側に変更することを策定（研究所棟の処遇については保留）
95	3	本館北側の付属建物の取壊し準備開始（8月取壊し）
	4	研究所棟の存置、正式決定
	春～夏	本館内の大部分の部局、仮移転
	9	新本館、取壊し後の本館北側で着工
96	春	旧本館の補修工事開始（年内に完了）
	11	大学創立50周年、新本館完成（翌年1月より業務開始）、旧本館は「大学記念館」に（短大本館は閉鎖）
98	2	大学記念館、文化庁より登録有形文化財に指定
	4	記念館内の展示室オープン（2007年記念館再補修、展示室改装）

（学内各資料および、当時の新聞記事より作成）

朝日

1993年(平成5年)1月26日 月曜日 13版 社会 (20)

旧陸軍の木造建物は残った



豊橋の愛知大本館

学内外論議にケリ

一九〇八年(明治四十一年)が建てられた、その後の、(一九三五年)豊橋第二師団司令部として、戦後、一九四五年(昭和二十年)に廃止された。一、二の建物は、

旧陸軍の明証としての木造建物の、建て替え計画をめぐり、取り残し保存か撤去か論議が起った。このため、この建物の払い下げ受領(一九四五年)後、昭和三十二年(一九五七年)に、昭和三十二年(一九五七年)代の人(豊橋第二師団司令部)の遺跡として、出土品(遺跡)も残った。

この建物の払い下げ受領(一九四五年)後、昭和三十二年(一九五七年)に、昭和三十二年(一九五七年)代の人(豊橋第二師団司令部)の遺跡として、出土品(遺跡)も残った。

歴史的価値も認め 建て替え計画変更 記念館にと構想も

この建物の払い下げ受領(一九四五年)後、昭和三十二年(一九五七年)に、昭和三十二年(一九五七年)代の人(豊橋第二師団司令部)の遺跡として、出土品(遺跡)も残った。

このため、本館を取り壊し、建て替える計画は、昭和三十二年(一九五七年)に、昭和三十二年(一九五七年)代の人(豊橋第二師団司令部)の遺跡として、出土品(遺跡)も残った。

【写真2】「愛知大本館保存決定」を伝える、当時の新聞記事

・記念館に関する史料

東亜同文書院大学記念センター内の「大学史事務室」では、前身にあたる「50年史編纂事務室」の時期から記念館(当初は本館)などの「旧軍以来の施設」に関する史資料の収集も行なっているところであり、以下記念館に関して、現在までに手元にある史料(第一次資料)について、個別の題名と内容を列記する形で紹介するとともに、各個人が記したり述べたりした「記念館論」についても続いて見てみることにしたい。

なお、「司令部」「本館」「記念館」などといった呼称は、以下原則として各史料・論稿が作製・

刊行された時期のものをそれぞれ使用することにする。

『豊橋第十五師団司令部敷地工事設計書及圖面』
(コピー。1908年頃作製、「豊橋市図書館蔵書」)
筆者個人が外部より譲受)
敷地と各部(下水溝・土塁・各門石橋)の規模を記すとともに、各部の仕様について詳述(図面は未確認)。
それぞれの工事の引渡し期日も表にして記載。

『豊橋第十五師団司令部敷地工事圖』
(コピー。1908年以前作製、広田長平氏寄贈)
縮尺600分の1(上の史料の図面か)。
司令部建物の向きが、実際とは異なるもの(西向き)になっている。

『愛知大学設立認可申請』
(1946年8月1日、『愛知大学五十年史 資料編』所収)
第13項「土地建物使用計画書」の「内訳」に、事務室ほか「木造二階建」建物の各用途や室数・坪数、それに各部屋が1階・2階のどちらにあるかを記載(55～56頁)。

愛知大学『学生便覧』
(1951・53・55年度版)
本館のレイアウトを、1階は「事務局」、2階は「研究室」の一覧(51年度版はいずれも「研究室」として記載)。

『愛知大学本館の保存等に関する調査報告書』
(財団法人文化財建造物保存技術協会編、1991年10月)
本館の概要・現状・耐力度や、保存する場合の施策・経費等について調査・報告。
これによって保存のメドが立つ(別表1)参照)。



「愛知大学本館建物 耐力調査報告書」

(株)山下設計 名古屋支社編、1991年11月)
前の報告書作製に並行して、業者が10月に本館の耐久性を調査した報告書。
「現在の骨組で建物全体の耐力は、維持できると考えられる」と結論。

“第一次資料”を広い意味で解釈すれば、〔別表1〕で取りあげた「飯田名大名誉教授の所見」や「高士会からの陳情書」（いずれも当時の愛知大学長宛て）、さらにそれぞれの時期（特に本館の処置が論議された1990年代）の学内会議関連記録も該当しよう。まだ公表するには時期尚早と思われるものもあるが、少なくとも“本館保存決定”から20年近くが経過しようとしている今として、その陳情書および、1992年5月の学部長会議でのアンケート結果を文末資料(①②)として別掲し、参考とさせたい。

・記念館に関するこれまでの研究書論 (関連分を含む)

記念館をはじめとする“愛知大学豊橋校舎内に残る旧軍施設”全体について、その歴史とともに存在を紹介した書物としては、これまで豊橋市当局による『豊橋市史 第四巻』（1987年）『とよはしの歴史』（1996年）や、いずれも地元在住の、水口源彦氏による『南栄町物語』（1996年）および兵東政夫氏による『軍都豊橋』（2007年）などがあるが^(註)、ここでは以下、対象が現記念館に絞られた形での、論文と講演記録を紹介したい。

小野木重勝「旧陸軍第十五師団司令部庁舎—旧陸軍第十五師団兵営遺構の研究(1)—」

(1993年、『日本建築学会関東支部研究報告集』所収)

第十五師団および廃止後の施設の沿革を述べた上で、本館の建築学上のデータと特色を分野・部分ごとに論述(2)は旧公館について)。

くろやなぎ 柳武司『講演 日本近代建築史における愛知大学の建物』

(1994年、愛知大学刊行ブックレット)

本館取壊しが論議されていた1992年、保存派の見学会開催にあたって招かれた名城大学教員の講演(〔別表1〕参照)を活字化。
本館をはじめとする学内現存の旧軍施設について、歴史意匠の面から説明。

きまた 木全敬蔵「100年前に大学記念館をつくった祖父たち」

(2009年、『愛知大学東亜同文書院記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2008年度版—3号—所収)

記念センター展示室改装の「お披露目会」(’08.9.27開催)での講演を活字化。
表題の通り、講演者(文化財研究所に以前勤務)の祖父は旧師団司令部の建築に、地元大工として参加した。

木全氏の講演記録中にある「基礎部分のレンガ積はイギリス積、外壁はドイツ下見張り、玄関入口はイタリアのトスカナ風等西洋風の意匠がふんだんに取り入れられている」(103頁)との記述は、(当人がその前に断っているように)小野木氏の論考をもとにしている。また、畔柳氏はほかにも、文末資料③の『近代を歩く』での、現記念館に関する記述(もとは1991年10月20日付朝日新聞連載記事「いまも」でのもの)を執筆している。

その『近代を歩く』をはじめとする、記念館自体に関する記述のある各書を〔別表2〕に掲載する。

おわりに

〔別表2〕で列記した各書(発行順)のうち、後半(すなわち比較的最近の刊行分)のものに「戦争遺跡」という語があるのが目立つが、

〔別表2〕記念館を「旧第十五師団建物」のひとつとして紹介している各書

書名	編著者	刊行年	版元
東海の近代建築	日本建築学会東海支部 歴史意匠委員会	1981	中日新聞本社
豊橋の史跡と文化財	豊橋市教育委員会	1981	
近代を歩く いまも息づく 東海の建築・土木遺産	東海近代遺産研究会	1994	ひくまの出版 (資料③)
図説 東三河の歴史 下巻	滝川元雄編集責任	1996	郷土出版社
愛知の戦争遺跡ガイド	あいち・平和のための 戦争展実行委員会	1997	
愛知県史 別編 文化財Ⅰ 建造物・史跡	愛知県史 編さん委員会	2006	
戦争遺跡を歩く	太平洋戦争研究会	2006	ビジネス社
戦争遺跡が語る 太平洋戦争	太平洋戦争研究会	2006	日本文芸社

これは戦後60年以上をへて、戦前・戦中を体験している人の割合が低くなりつつある状況をうけて、戦後世代が以後“あの時代を知るための手がかり”として、旧日本陸海軍が建てて現存している（平時・戦時双方での）遺跡の存在がクローズアップされてきていることを示している。

“軍都から平和都市に変貌した”豊橋市のひとつのシンボルとしても、記念館は以前からイメージされてきた面はあると思えるし、これからはさらに（豊川海軍工廠^{こうしょう}の跡地などとともに）“この地区の代表的戦争遺跡”として、記念館は認識されていくであろう。だからこそ筆者としては、ここで“記念館略史”をまとめなければと思い、今回のテーマにしたのであるが、建物の建築史や歴史意匠の面でいえば、その方面で小野木氏や畔柳氏がまとめた成果をあげておられるし、それら

を専攻している若い研究者が今後続いてくれることを期待したい。では筆者はということになるが、名古屋笹島への進出を近く控える愛知大学にとって、移転は“新たな歴史の誕生”ということになるだろう。そしてそのことはまた、それまでのいくつもの事象が“歴史”として完結されることにもなるであろうから、その一つとして、1990年代に存在した“本館保存問題”というものを、（笹島キャンパスとともに）今後も愛知大学の顔となるであろう記念館のために追究していきたいところである。

（註）筆者としては、愛知大学の『一般教育論集』第31号（2006年）に「愛知大学豊橋校舎旧軍施設の変遷」として、大学創立時にあった各旧軍建造物の、第十五師団から愛大までの各時代における変遷を概述したことがあるが、記念館に絞った形では発表していなかった。

文末資料 (①～③)。以下〔 〕内は今回の注記)

資料①

豊橋校舎木造建物に関するアンケート集計結果

(1992.5.8 学部長会議資料)

	所 属	対象者	回答者	(マ) 回答率 (%)	(1)の回答者	(2)の回答者	(3)の回答者	その他の回答者
豊橋	文 学	32	10	31%	2	6	1	1
	経 済	27	12	44%	0	10	2	0
	教 養	31	9	29%	2	5	1	1
	短 大	15	11	73%	0	4	7	0
	事 務	97	36	37%	0	12	24	0
	計	202	78	39%	4	37	35	2
名古屋	法	25	6	24%	0	2	2	2
	経 営	22	6	27%	0	1	5	0
	教 養	27	3	11%	1	1	0	1
	事 務	45	4	9%	0	1	3	0
	計	119	19	16%	1	5	10	3
車道	事 務	9	0	0%	0	0	0	0
	計	9	0	0%	0	0	0	0
総 計		330	97	29%	5	42	45	5

木造建物のうち保存したいと指摘のあった建物

順位	建 物 名 称	票数
1	短 大 本 館	39
2	本 館	26
3	第 二 体 育 館	16
4	研 究 所・研 究 所 倉 庫・便 所	14
5	中 日 辞 典 編 纂 所	12
6	国 際 交 流 課・就 職 課 資 料 室	11
7	本 館 倉 庫・便 所	10

注記：アンケート項目

- (1)…木造建物を全体として保存する。
- (2)…木造建物の一部を保存する。
- (3)…木造建物にこだわらず豊橋校舎の総合的な再開発を考える。

資料②

愛知大学長

石井 吉也殿

平成4年7月16日

愛知大学本館を旧軍史跡として保存されたい旨の陳情書

数年来、愛知大学豊橋校舎の本館をはじめとする旧軍の建築物につき、取壊しか、移転保存かについてご検討の由、承っております。ご承知の通り、本館は明治^(ママ)38年7月、第15師団の編成にあたり建築され、その後大正14年5月に第15師団は廃止されましたが、昭和2年8月に豊橋陸軍教導学校が開校されました。その後の旧軍の制度改正により、昭和13年4月10日豊橋陸軍予備士官学校として使用され、昭和20年の終戦まで旧軍の中堅下士官及び将校の養成学校として、重要な役割を果たしてきました。

豊橋は、戦前、戦中は、蚕都・軍都として栄えました。特に第3師団18聯隊とともに、豊橋陸軍教導学校・豊橋陸軍予備士官学校は、地元は申すに及ばず全国的に有名でした。卒業生は、戦時中豊橋時代の厳しい修練の体験を誇りとし、旧軍の中核として勇戦奮闘しました。国難に身を呈^(ママ)して戦死された方々も多くおられますが、現在存命の方は当時を懐かしみ、来豊の節は、多くの方々が昔を偲び残存校舎の一部を見学し、思い出を新たにしております。これらの方々には、現在実業界に活躍され、また大学教授として後輩の指導にあたり、さらに政界、言論界に著名な方が多々おられます。戦前、軍都としての建物は、旧第18聯隊のものは全くなく、寂しいかぎりです。諸種の事情があることとは思いますが、できるかぎり多くの建物を保存していただきたいと存じます。特に旧第15師団、豊橋陸軍教導学校、豊橋陸軍予備士官学校時代を通し、師団指令部、学校本部として使用され、最も象徴的建物である本館を是非保存していただきたいと存じます。

全国的にも数少ない旧軍の施設として、豊橋と旧軍の関りの歴史を伝える上においても極めて貴重な建物であります。ご配慮の程お願い申し上げます。

以上豊橋陸軍教導学校、豊橋予備士官学校、教官・生徒を代表し、陳情申し上げます。

高士会世話人代表	伊藤 松太郎〔住所略、以下同〕
世話人	石原 四一
世話人	広田 長平
世話人	小林 卓三
世話人	田村 清登
世話人	加藤 久義
世話人	豊川 英敏

追記

高士会は、当時の教導学校、予備士官学校の卒業生及び教官の同窓会です。毎年一回それぞれのグループごとの会合を実施しております。



資料③〔前掲『近代を歩く』116頁での記述〕

愛知大学本部・学舎（旧陸軍第15師団兵舎） 潤いと個性的な環境

豊橋の中心部から田原街道を伊良湖方面に3kmほどの郊外に、愛知大学の本部がある。明治41年配備の旧陸軍第十五師団の兵舎の遺構を、そっくり施設に転用している大学として、知られる。

師団司令部が大学本館、将校集会所が女子短大本館、兵舎が教室や学生寮に使われ鉄筋の講堂は現在もそのまま体育館として使用されている。この景観は、戦争映画の撮影にも利用されるという。

これら一連の施設は、明治40年に大林組の請負で着工、42年5月に完工した。加藤十次郎など地元の建築業者も多く参加、なかでも地元資本で設立された牟呂組はセメントなど建築資材を供給した。豊橋市4万人の人口に1万の兵士が加わり、さらに将校3百余人の家族が一挙に増えるなど師団の建設が地域の振興に大きく寄与したといわれている。

兵舎は、レンガ積の基礎に木造下見板張で、上げ下げ窓を入れ、材料も統一されている。すべて東西に長い長方形で、広い営庭を囲んで建てられた。本部は木造2階建て中廊下式で、中央階段を上った正面に師団長室（現学長室）を配している。中央に妻壁飾を付けた玄関を突出させ、1、2階の境にはスジを入れた胴蛇腹を付け、かんじょうな風格を見せている。

大学から北へ500m離れた丘の師団長官舎は、大学公館である。和館と洋館を巧みに組み合わせた洋風建築で、大正6年に師団長として久邇宮邦彦が着任している。

愛知大学は、歴史的建造物の活用で、潤いのある個性的な環境を生み出し、成功している数少ない例である。ところが、これらの施設を取り壊すことも、検討中と伝えられる。日本建築学会の内部には「文化財指定の価値がある」と、保存を求める声強い。

（畔柳 武司）

〔縦書きの原文を横書きで表記するにあたり、
一部漢数字を算用数字に改めました〕